
TwinDareDevilBirth

字紀 彦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tw i n D a r e D e v i l B i r t h

【Nコード】

N 5 2 8 7 A

【作者名】

字紀 彦助

【あらすじ】

N c o d e : N 4 1 0 6 A の『Tw i n D a r e D e v i l』の主人公『竜胆』と『渚』の出会いのお話です。

前編・潤平（前書き）

本作はN c o d e . . N 4 1 0 6 A 『T w i n D a r e D e v i l』
の続編です。

前編・潤平

薄暗い夜道。

ひと気のない路地だ。

渚：いや、この時点ではただの高校生、加藤潤平は、部活の帰りによくこの道を使用していた。

ひと気のない道は危険だ。しかし、人のいない道は、安全である。

ただし、この日のこの道には、彼の想定範囲にかすりもしない危険が待っていたのだが。

Twin Dare Devil Birth

— 洗礼、または烙印 —

潤平は、背中にバドミントンのラケットを背負い、左肩から学生カバンをぶら下げて歩いていった。カバンの中からコードが延びて、彼の両耳につながっている。

サカサカと、気の抜けた音漏れが微かに響く。

潤平の耳には、部活の友人から借りたQUEEN初期のシンフォニックなサウンドが流れ込んでいた。

一般的なJ-POPしか聴いた事がなかった潤平には、ブリティッシュロックの良し悪しはまだ分からない。

しかし今流れている曲は好きだ、と単純に思った。

『母さん、僕は人を殺してしまった』

『銃を奴の頭に向けて、引き金を引いたら奴は死んだ』

英語がとても苦手な潤平にも、断片的にそんなような歌詞が聞き取れた。

切なくて苦しくて、でも交響曲のように整って、現実味がないくらい美しい。

その音に混じって、パン、パンと爆竹の様な音が聞こえた。

音楽の一部かと思い聞き流すが、どうにも拍と外れた調子のそれに、人の叫ぶような声が混じる。

普段ぼんやりとしてあまり物事に気づかない潤平も、さすがに怪しんで周囲を窺った。

いや窺うまでもなかった。彼のすぐ足元で突然火花が散る。訳も分からず、体だけは防衛本能で飛びのく。

…それは彼の目にも不思議な光景だった。

黒いスーツの、眼鏡をかけた男が走ってくる。

その後ろを、何人かの人間が追っている。手には、銃？ 部活柄、動体視力には事欠かない潤平だが、目がそれを正確に捉えても脳が処理をしきれない。

眼鏡の男の髪は乱れ、スーツもところどころ破れていた。薄い唇から血が流れている。もはやそれが見える程近い。潤平は立ちすくむ。両耳からは、QUEENが垂れ流れている。

男と目が合う。

潤平は思う。

狂った目だ。

でも、何て綺麗に狂っているんだろう。

男が、切羽詰ったように潤平の両肩を掴んだ。潤平が怯える隙も与えず、上がった息で囁く。

「君の体、少し借りるよ」

え？

と思う間も無く、潤平の体が奇妙な浮遊感に包まれる。訳が分からない。夢を見ているようだ。

自分が銃を持った男たちに向かって行き、蹴り、殴り、踵を落とす。

眼前にそんな風景が映し出されていていつて、脚にも蹴る感触があるのにそれらが完璧に現実感を欠いている。

耳元で、ただQUEENが鳴り続ける…

夢から醒めたように、潤平の体に自由が戻って来た。体中の筋肉に激しい痛みを感じ、崩れるようにうずくまる。

すると自分の周りに何体もの死体があるではないか。

潤平は、声にならない悲鳴をあげた。

「助かったよ。俺とした事がしくじるところだった。感謝する」
男が近寄ってくる。潤平は力なく男を見上げた。

「…………オレ、一体…」

「ああ、すまない。しかし奴らは君の体を使って俺が殺した。俺の所業だ。君が気に病む事は無いし、さる事情があって警察沙汰にもならない。その点は安心していい。…それにしても…」

「…え？」

男がしゃがんだ。顔の高さがほぼ同じになる。潤平は男の顔を見た。

冷たいばかりに見えた面差しは、じっくり見ると案外優しくだった。ノンフレームの眼鏡の下の瞳から、ぎらぎらと突き刺すような才気と、相手を抱き締め過ぎて殺すような愛情がのぞく気がした。

「君ほど操り易いのは初めてだ。これから現れるとは断言できない位だよ」

皮肉げな笑み。

「あんた…独り、なのか？」

何故かそんな言葉が潤平の口を突いて出る。潤平は思う。初対面の相手に、どうしてこんなことを。ただ、さっきの夢（悪夢？）のような時の間、訳の分からない悲しみと、その淵から沸き起こるような深い怒りが伝わってきた気がしたのだ。それは単なる興奮とは全く違う、とても複雑な人間の心だった。

その言葉に、男は虚を突かれたように右手の人差し指で眼鏡を押し上げた。

「…ふっ…独り。確かに俺は独りだ。たった今も相棒をなくした。

…君には関係の無いことだ」

男が立ち上がる。

「さあ、悪夢は忘れてくれ。君の世界に戻るがいい」

男は口の血を拭くと、踵を返し歩き出した。

と、ふと何かを思い出したように足を止め、横顔だけで潤平を振り返る。

「QUEEN。いい趣味だな」

そう言う唇に軽く笑みを浮かべ、再び夕闇の道に消えていった。

潤平の耳に、思い出したようにQUEENが聞こえた。

後編・竜胆

「カトオオ!! 集中切れてんぞ!!」

「…ウスッ」

「やる気あんのか!!」

「ウスッ!」

そう言ったのは返事をしなければコーチの報復が恐ろしいからで、潤平はとても集中できるような気分でも体調でもなかった。

昨夕の出来事。謎の男。勝手に動く体。転がる死体。

心がざわざわしてシャトルに目が追いつかず、追いついても猛烈な筋肉痛で体思うように動かなかった。

集中力が切れれば全てがミスにつながる競技（と潤平は思っている）、バドミントン。

この学校のバドミントン部は、顧問もコーチも恐ろしい。

ほんの何ヶ月か前、三年の引退までは、上級生も理不尽に厳しかった。それこそ不当だった。バドミントンとは関係の無いところでさえ、奴隷かのように扱われる。それが彼らが引退し、自分たちがその立場になった。潤平には実感がない。

ただバドミントンが好きで入った。今もバドミントンは好きだ。

しかしここにいなくても、バドミントンは出来るのではないか。そんなことを思いはじめていた。

その日の部活はいつもよりずっと長く感じられ、やっとこさ解放されると潤平は片付けもそこそこに帰路に就いた。

と、いつものように薄暗い近道に足向けかけ、躊躇う。

昨夕、信じられない事が起きた道だ。母にそれとなく避ける様に言われていた意味が漸く判った気がする。といって母もここまでのことは想像もしていなかっただろうが。

しかしあれだけ人が死んでいて、何故今日何の騒ぎにもなっていないのか。

『去る事情があつて警察沙汰にもならない』そんな事を男が言っていたのを潤平は思い出した。そんな重大な事情がこの世にあるものだろうか。

潤平は思った。多分二日も続けてあんな目に遭うことはないだろう、昨日の現場がどうなったのかだけ、確認しよう、と。もしかしたら昨日のこと自体がすべて幻だったのかもしれない。

そう決めて、潤平はいつもの道を歩き出した。

イヤホンを取り出し、MDプレイヤーの再生ボタンを押す。昨夕と同じ音楽が流れ、情景が生々しさを持って思い起こされる。しかし聴覚を奪うそれは、いくばくかの恐怖を和らげてくれる気がした。

ちょうど昨夕の地点に立ち、コンクリートをつぶさに見る。

死体はおろか血痕すら一滴たりとも見当たらなかった。

やはり昨夕のことはただの幻だろうか、という思いが去来する。

潤平は立ち止まって考えていた。

そして気づかなかった。背後から一台の黒いセドリックがやってきたことに。

そこから一人の影が潤平ににじり寄っていることに。

車のエンジン音も、迫り来る足音も、確かに鳴っていた。

しかしそれらは全て、QUEENに打ち消されていた…。

「……!!!!」

潤平の意識が、遠のいた。

黒いスーツの眼鏡をかけた男：ここでは竜胆^{リンドウ}と呼ばれている：は、目の前の状況に嘆息した。

暗い廃ビルの地下。この場所自体は、彼はうんざりするほど知っている。歩けば必ず何かを踏みつけずにはいられない、ごたごたのまま放り置かれた空間。僅かに点滅する蛍光灯が、かろうじて人の手が入られていることを示している。

ここは、彼の“仕事場”だった。飼い主に与えられた、番犬の犬小屋。

その空間のど真ん中で椅子に縛り付けられた、一人の少年（詳しくは青年との中間くらい）。

適度に手荒な手段で連れ去られたのだろう。静かな息で眠らされている。

その様子に竜胆は眉根を寄せた。『こちら』の世界に巻き込む気はなかった、と。いや、『飼い主』に悟られぬようには動いたが、向こうのほうが一枚上手で、そして非情だった。完璧なる忠犬を装いその喉笛を噛み切る日を、竜胆は虎視眈々と狙っていた。そのための武器は、鋭利であればあるほど勿論望ましい。しかしどんなに有能な武器であっても、こんなに潔白な、感じなくて良い罪悪感をも背負わされるブツは彼はごめんだった。それでもトップダウンの指令では仕方が無い。表向きでは、まだあの組織に逆らうわけにはいかない。しかし腹の内では軽蔑しきっている奴らに思わぬ王手を指された事が、竜胆は内心面白くない。それどころか激しい屈辱感

を覚えていた。そしてそれを認めてしまえばますます自分が低くなる事に気づいており、その感情を無理に意識から押しやっていた。――まあいいさ、ならばせいぜいこの素晴らしい道具を利用して頂だけだ…。

少年の頭がピクリと動いた。そしてそれがゆっくりと起こされる。彼特有の、感情の分かりにくいやや黒目がちな瞳がまっすぐこちらに向けられる。

そして、辺りを見回す。茫然としている。当たり前のことだ

「君、しくじったな」

声をかけると、少年は再び竜胆に顔を向けた。

「…これ、…何だ？」

竜胆はそれに答えず、続けた。

「しかしいくら俺が『忘れろ』と言ったからといって、昨日の今日でよく同じ道が通れたな？ 巻き込んだ俺が悪かったが、君にも責任の一端はあると思うよ」

「だからこれは…」

「薄々は判っているのでは？ こういうことさ」

竜胆は少年の心に入り込む。

やはり、かつてなく侵入が容易だ。するりと、まるで誘い込まれるように彼の体の主権を奪う。

この力が何なのか、竜胆にもわからない。あらゆるオカルト的な物に否定的であるにも関わらず、この奇妙な力は占い師でも霊能力者でもなく他ならぬ彼に与えられた。

自身の体を動かすより容易く少年の戒めを解かせ、ついでにバツク宙をさせる。

『!?!?』

彼が驚いているのが判る。しかし表情一つ動かさへしないだろう。彼の随意筋という随意筋は、全て竜胆の管轄下にあるのだから。

「俺はね、何故だか知らないが他人を強制的に操る力を持っている

んだよ。馬鹿馬鹿しいが認めざるを得ないだろう？ 俺だってこんな非科学的なこと信じたくも無いさ。しかし現実だ」

そう言うとき竜胆は彼の精神から撤退した。それでも少年はその場から動こうとしなかった。

「それでも相性ってやつがあつてね。普通なら手を握らせるくらいが限界だ。人によってはまんじりともさせられない。しかし君は」

ご存知の通りだろう？ と目で言う。

「しかしさっきも言ったとおり、君、あの道さえ二度と通らなければこんな目には遭わなかっただろうに。俺の『飼い主』サマは番犬の俺以上にハナが利くんでね」

少年が絶望的な瞳で竜胆を見上げる。

「…飼い主って、だれだ…？」

「それは、もったもたない質問だけど答えるわけにはいかない。これ以上知られちゃあ、二度と明るい世界に返してやれなくなるからな。」

…ただ、言えるのは、奴らは一人ではない。巨大だ。ただし普通の世界に生きていれば決して見ることはない。もし見ても、気づかない。子供のころ、玩具で無邪気に遊んでいてもそれが大人たちの会社によって企画開発・生産されていることなんて知らなかったろ？ そういうようなものさ。そして奴らは、都合よく、奴らにとっての敵を噛み殺す番犬を必要としている。たとえば俺や、君のときさ。それでさえ奴らの全貌の内のほんの一角でしかないが」

竜胆はあえて具体的な話をしなかった。少年は、それがわざとであると感じた。だから何も言わなかった。そういう少年だった。

「じゃあ、オレはこれから…」

「判っているだろう？ 残念だったな」

竜胆が少年に右手を差し出す。

少年は彼に操られるでもなく、その手を握った。理屈でもなく、保身のためのみでもなく、何か不思議な力によって。

それが彼らの出会いとなった。

T D D B i r t h ・ E N D

・おまけ・渚へ

おまけ・渚

「君、名前はどする」

握った手を戻しがてら眼鏡の位置を直しつつ、竜胆は言った。

潤平はきよとんとした。掛けられた言葉の意味が飲み込めない。

「加藤潤平…」

そんな潤平に、竜胆はからかうような笑顔を浮かべた。

「ま、こっちの世界で本名のまま有名になってもいいんなら潤平でも何でも好きにどうぞ」

「え…」

「だろ。だからどんなにふざけた名でも『そういうこと』にして貰うのさ。何がいい」

「何って…」

本当に何も浮かばないらしい顔。

「…じゃあ、君、好きな映画監督は？」

「……大島渚…とか…」

といっても、本当に大島渚が好きな人の前に出て行って同じ事が言える程詳しくもない事は本人も承知していた。ただぼつと言える名前がそれだけであったというだけの話だった。

「そりゃまた随分渋いな」

竜胆は笑い混じりに言った。

「じゃあ、君は『渚』。『渚』だ」

順平は嫌と言わなかった。竜胆はそれをひとまず肯定と取る。

「申し遅れたが、俺は『竜胆』だ。改めてよろしく、『渚』君」

そう言うとき竜胆は渚に携帯電話を手渡した。

銀色の二つ折り。オーソドックスな形。

渚はそれを見つめた。これを持つ事は、『潤平』とは明らかに違

う『渚』の自分を心の中に構築するのに他ならないような気がした。

「……………」

潤平は、いや、『渚』は、その携帯電話を静かに握り締めた。
なぜか不安はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5287a/>

TwinDareDevilBirth

2010年10月8日15時53分発行